

職場の先輩に勧められて技術士を取得して2年半になる。水産試験場は魚介類や海洋環境の調査研究が業務の中心であるため、博士号の取得を目指す職員が多い。当時の私は博士号を目指す金銭的・心理的余裕もなく、技術士は試験でとれるという先輩の誘いに乗り、難度も知らずに勉強を始めた。ほどなく2次試験の難しさを知ることになり、私の机は真っ赤にペン入れされたボツ答案の山に埋もれていった。何度修正しても及第点の答案ができず、自己嫌悪に陥った時期には、先輩が私の机に近づいてくるだけで脈が上がり、胃も痛くなったものだ。

技術士を取ってから変わったことと言えば、論理思考力が上がり、仕事の提案力が上がったことが大きい。闇雲に重要性を訴えた昔と比べ、現在では部外者にも説得力を持つ内容や構成で提案できるようになったと感じている。水産試験場が水産業の発展につながる技術開発を使命としていることや、研究資金の配分を判定する委員の多くは専門分野が異なる現状を考えると、もっとたくさんの職員がこの資格を目指すべきだと思う。今私は「磯焼け」と呼ばれる海藻が激減する現象の対処を担当している。これまでの研究で、海藻が生えない個々の要因はわかってきた。しかし実際に海藻を生やしたい場所にそれらの「要因」がいくつあるかを判別するのが難しく、まだまだ対処技術は未完成である。磯焼け対処の研究を続ける中で技術士の使命を果たしていきたい。

秋野 秀樹 (あきの ひでき)

●水産部門(漁業及び増養殖)

勤務先

道総研 中央水産試験場
資源増殖部



→ 次号は、山口幹人さん(水産部門)

我社は江別と北陸を拠点に暗渠排水の仕事をしています。江別といえば、町村農場や土管の生産等土地改良に熱心な街で、我社があるのも理解できます。それではなぜ北陸で仕事をしているかと言うと、それは「稲塚権次郎さん」のおかげです。社長が北陸の営業していた頃、稲塚さんに出会い「裏作で麦を作るためには暗渠排水が必要だ」と言われ、

いろいろな所に連れて行かれたようです。まだ、車が一般化している時代ではなく、汽車の移動中に稲塚さんから暗渠排水の必要性を教わったと言っています。この稲塚さんとは世界の食料に大きな貢献をした育種家です。みなさんは「緑の革命」という言葉をご存知でしょうか？ アメリカの育種家ノーマン・ボローグ博士が背丈の低い収量の取れる小麦を開発し、1960年代中頃に危惧されていた世界の食糧危機を救った話です。ボローグ博士は「世界で最も多くの人々の命を助けた」とノーベル平和賞を受賞します。しかし、私はこの「緑の革命」の立役者は稲塚さんだと思っています。戦後アメリカは日本の技術を本土に持ち帰り、その時に「農林10号」という小麦がアメリカに渡ります。ボローグ博士の作った小麦は、この「農林10号」を親に持つ小麦ですが、この小麦がどこから来たのか分からないでいました。後に稲塚さんが英文で「農林10号」を作った事を発表され、日本から来た事を知るので、私の仕事も歴史に導かれている事を自覚しながら、北海道、北陸に留まらず、日本の農業に貢献しなくてはならないと考えています。

奈良 幸則 (なら ゆきのり)

●農業部門

勤務先

株式会社 ナラ工業
nr-yuki@narakougyou.com



→ 次号は、杉本雄一さん(建設部門)